「罪人への神の愛」

（ローマ５：１～１１）

2018.4.8

先月の初め、私たちの教団の年会があり、その２日目に、一年の間に召された牧師たちを記念する追悼記念会があり、私も父の思い出を短くお話ししたことでした。その次の日、台湾宣教師として長く奉仕された木下理恵子先生が私のところにきて、父のことについてこんな話をしてくださいました。父が牧師を隠退する直前、岡山の柵原教会で奉仕をしているとき、木下先生が宣教報告の巡回のため、岡山市から柵原教会まで２時間近く父の車に乗って一緒に移動したときのことです。話をしている中で、私たち３人の子どもたちの話になったといいます。父は、「信人はまだ家にいるとき、『牧師だけには絶対にならない』と強い口調で言っていた。それは、自分が子どもたちをあまりにも厳しく育てすぎたからであり、子どもたちにはかわいそうなことをした。申し訳なかった」としみじみ語っていたということでした。まさか父がそんなことを思っていたとは、私たち子どもたち３人は全く知りませんでした。いつも、「お父さんたちは僕たちの気持ちなど全く分かっていない」と不満に思っておりました。父が子どもたちに対してそのように思っていたということは、私たちにとっては驚きであり、私たちが知らない父の思いを教えていただいて、涙が出るほど嬉しい話でありました。ただ、「そう思っていたのだったら、生きているうちに、直接言ってくれたら良かったのに。ちゃんと言葉で伝えてくれないと分からないよ！」と思ったことでありました。「親の心子知らず」と言われますが、「子どもたちのことをそのように思っていてくれたのか」と父が死んでから初めて知らされたことでした。

目に見える自分の親の思いさえ分からない私たちですから、天の父なる神さまが私たちに注いでいてくださっている大きな愛が、私たちにはなかなか分からないのではないでしょうか？　５章の前半のところを何度か読んでいますが、前回お話ししました５節に、「**なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである**」とありました。「**神の愛が注がれている**」と聞いて、「本当にそうだなあ」と思うでしょうか？　それとも、パウロがこのように熱く語っても、あまり実感のない言葉として、「ふ～ん、そうなんだ」というぐらいに受け止めるでしょうか。

問題となりますのは、私たちが神の愛をどこに見つけようとしているか、ということでしょう。パウロと私たちとでは、神の愛を見い出そうとする場所が違っているようであります。私たちの場合、自分の個人的な願い事がどのように聞かれたか、自分の生活がどのように良くなったか、というようなところに神の愛を見いだそうといたします。そのために、変わることなく注がれている神の愛が見えない、よく分からない、となってしまう。それどころか、神はわたしのことを本当に愛してくださっているのだろうか？と疑ってしまうことさえ起こってまいります。今朝、み言葉をとおして、パウロと同じように、私たちに変わることなく注がれている神の愛を見つめ、そ

の神を喜びとしたいと思います。

5節で、「**わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである**」と語ったパウロは、その神の愛がどのようにして表されたのかを続けて語ります。6節に、「**わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである**」。8節ではもっとはっきりと、「**しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである**」とあります。私たちに対する神の愛がどのようにして示されたのか、それは「**わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって**」と語られています。主イエスが十字架で死なれたということは、私たちに対する愛の表れである、といいます。

その十字架の死について、パウロはそれが「**わたしたちのため**」であったと繰り返し語ります。キリストは、私たちのために、ご自分の命を差し出してくださった。主イエスが十字架で死なれたということは、敵対していた祭司長やパリサイ人たち、あるいはローマの兵士たちによって無理やり命が奪われたというようなものではない。そうではなくて、主は私たちのために、自ら進んでご自分の与えてくださった。

この「**ために**」という言葉は、「代わりに」と訳すことのできる言葉であります。すなわち、キリストは私たちの代わりに死んでくださった。本来、罪に対する神の裁きとして、私たちが死ななければならなかった。その私たちに代わって、死ぬべき私たちに代わって、キリストが十字架で死んでくださった。

信仰生活が続いてまいりますと、私たちは、いとも簡単に、主イエスが私たちのために死んでくださった、と言って平気でいたりします。けれども、身近な方々の死に接して思うことは、命というものは、私たち人間にとって一番大事な、かけがえのないものであります。多くの持ち物があっても、あるいは社会的な地位や名誉、業績などがあっても、命が尽きてしまったら、そこで終わってしまう。命以外のものは、一度失っても、生きていれば、もう一度取り戻すことができるし、あるいは、なければないで済むものばかりであります。しかし、命だけは、替えが効かない。だからこそ、私たちは、命だけは奪われないように、失わないようにと、必死になって守ろうといたします。ところがここで、主イエスはその大切な命を、私たちのために差し出してくださった。しかも、死ぬことなどありえないはずの神の御子が、私たちを生かすために、私たちを罪の滅びから救い出すために、死んでくださったという。「あなたが生きるためなら、私の命をあなたに差し出してもいい」と言われた。それは、ご自分の命よりも私たち人間の命のほうを大事にされた、ということであります。それこそ、聖書が「愛」と呼んでいるものです。神の子イエスは、十字架において私たちのために死んでくださったことによって、私たちに対する限りない愛を示してくださいました。

その十字架の死について、6節では「**時いたって**」と言われています。これは新改訳聖書などでは「**定められた時に**」と訳さ

れています。父なる神によって定められたときに、そのご計画のとおりに、死んでくださった。神さまの側では、はるか昔から準備がなされ、ついに時が満ちて、最も良い時が来て、キリストは私たちのために死んでくださった！と言う。

では、その神の愛を受ける人間の側はどうだったのか？　私たちの側でも、神の愛を受ける準備ができていたのか？ふさわしい時に至っていたのか？

パウロが語るには、人間の側はそれとは全く反対で、神の愛を受けるにふさわしい状態などではなかった、という。パウロはそのことを、「**まだ**」という言葉を繰り返し用いて表現しています。6節に「**まだ弱かったころ**」、8節でも「**まだ罪人であった時**」。私たち人間の側では、神の愛を受けるにふさわしい状態ではなかった。

6節に「**まだ弱かったころ**」とありますが、私たち人間が持つ弱さにもいろいろありますが、何よりも自分で自分を救うことができない、正しいことを行うことができない弱さであります。その弱さは、そのすぐ後で、「**不信心な者たち**」と言い換えられています。私たちの側に信仰心があって、それを見て神さまが、「この人は合格」と言って死んでくださったのではない。反対に、造り主なる神を畏れず、神を仰いで生きようとしない不信心な者たちのために死んでくださった。

そのことを8節ではもっとはっきりと、「**まだ罪人であった時**」といいます。以前は罪人であったけれども立ち返って、向きを変えて、神のもとへ立ち帰ってきたから、「それなら赦してやろうか」と神さまが心を変えて、愛してくださった、というのではありません。まだ悔い改めの姿勢など全く見せていないときに、まだ罪のただ中にどっかりと座り込んでいたときに、すなわち、神の愛を受ける資格など全くない時に、そういう者たちのためにキリストは十字架で死んでくださった。言うならば、私たちが、決していい子ではないのに、神さまは私たちを愛してくださった。

パウロはこのように、「**まだ弱かったころ**」（6）、「**まだ罪人であった時**」（8）と言葉を重ねながら、これは、本来はありえないこと、考えられないこと、驚くべきことが起こった、と言っています。決して当たり前のことなどではない。もしかしたら、私たちは神の恵みに慣れっこになってしまっているかもしれない。そういう私たちに対して、聖書は、驚くべき神の愛が私たちに注がれているのだ、という。考えられないこと、ありえないことが起こったのだ。

パウロはその驚きを7節でこう表現しています。「正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう」。「**正しい人**」とは、神さまが与えてくださった律法を守ることによって正しく生きようとする人のことであります。ある人は、「四角四面なまっすぐな人」と言い換えています。こういう人は、道徳的には立派な人だけれども、この人のために死んであげようという気持ちはそう起こらないとパウロは言います。

さらに、「**善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう**」。この、口語

訳の「**善人**」というのは、「正しい人」というのと同じように思えるが、意味するところはちょっと違って、新改訳では「**情け深い人**」と訳しています。正しいというよりも情にあふれている人であり、周りの人にほろりとさせるタイプの人。そういう人のためならば、自らの命を差し出す人もあるいはいるであろう、と言う。時代劇などで、「殿のためならば、この命を喜んでおささげします」という家来たちのようです。

続く8節に「**しかし**」とありますが、この7節と8節との間には、パウロがわざわざは言っていないことが言外に含まれているといっていい。すなわち、正しい人のためにさえ死ぬ者がいないとしたら、まして悪人のために、罪人のために死ぬなんて人など決していない、ということ。悪人や罪人といった、何の価値もない人のために、あるいは何の人望もない人のために、「自分が代わりに死んでやろう」などというバカなことを言い出す人など絶対にいない。

それを受けて、ところが、8節で「**しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである**」と続きます。なんと、神の子イエスが、罪人であった私たちのために、十字架で死んでくださった。人間の中には、そんな愚かなことを考える人などいなくても、神の御子イエスは、そういうバカげたことを、愚かなことを、考えられないことをしてくださった。ご自分にとっては何の利益にもならない、得にもならないことを主がしてくださった。利益になるどころか、人間の価値観からすれば、損にしかならないことをされた。

パウロは「**罪人**」というのをさらに言い換えて、10節で「**わたしたちが敵であった時でさえ**」と言います。私たちは神に敵対している者たちであったと告白する。ただ価値がないというだけでなく、すなわち、価値がゼロというだけでなく、価値がマイナスであったとき、ご自分に敵対し、ご自分を苦しめるような者たちのために、身代わりとなって十字架で死んでくださった。

私たちの愛というものは、相手を愛しているようでありながら、本当はそれによって自分を喜ばせるためであったりいたします。愛することにおいてさえ、本当は相手のことよりも自分のことを考え、利己的になる。けれども、御子イエスの場合、ご自分を喜ばせるためでない、ご自分は、人を愛するために自ら苦しみ、引き裂かれそうになりながら、敵であった私たちのために死んでくださった。これこそ、主イエスが私たちに示してくださった本物の愛であります。

今日の説教の初め、私たちは神の愛をどこに見いだそうとしているか、と問いかけました。神の愛が見えない、よく分からないと思うのは、神の愛を見いだそうとする場所が違っているからではないか？と。パウロは私たちに、「この一点を見つめなさい。そうすれば、あなたがたにも、神の愛が分かるはずだ」と言うのです。私たちがまだ罪人であったとき、いや神の敵であったとき、キリストは私たちのために十字架で死んでくださったではないか。私たちが少しはマシになったから、それだから代わりに死んでくださった、というのではありません。悔い改めたから、だから赦してやるとか、だから愛してくださるといったも

のではありません。まだ、敵そのもの、罪人そのもの。ゴルゴタの丘で主イエスが十字架にかけられたとき、群衆たちは、寄ってたかって主イエスを嘲りました。「何が神の子だ」と言った。私たちもあの群衆と同じように、自分にとっていいことがないと、自分の思い通りにならないと、すぐに「なにが救い主だ」と言い出しそうになる、そういう私たちではないでしょうか。けれども主イエスは、そのような私たちのために、「**父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです**」（ルカ23：34）と祈られました。神の愛が分からない者たちに、「そんなやつはもう知らない」と言って捨て去るのではなく、そのような者たちのために救いを祈り、限りない愛を注ぎ続けてくださいました。

パウロが、「**まだ罪人であった時**」「**敵であったとき**」と言うとき、パウロは自分の人生を振り返りながら、自分のこととして、実感を込めてこれを語っているのでありましょう。パウロはかつて、神に敵対し、キリスト者を迫害し、殺そうとしていた者であります。クリスチャンと捕らえようと、意気揚々とエルサレムからダマスコへと向かっていた。その途中、天からの強い光に打たれて倒れ込み、そこに復活の主が語りかけられた。「**サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか**」（使徒行伝9：4）。あのとき、まさにキリストの敵であったこの私を救い出そうとして、復活のキリストが私に現れ、声をかけてくださった。クリスチャンを捕らえようとして、殺そうとしていた私、その私を、キリストが追いかけてきて、ついに私を捕らえてくださった。私が神の子とされたのは、あの神の側からの働きかけがあったからだ。まだ敵であったとき、クリスチャンを殺そうと息巻いていたときに、そういう私をなんとしてでも救おうとする救いのみわざは神の側から始まっていた。何の価値もないこの私のために、キリストを迫害するような敵であった私のためにも、主イエスは十字架で死んでくださった。

そういうパウロはテモテに宛てた第一の手紙でこう述べています。「**『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった』という言葉は、確実で、そのまま受けいれるに足るものである。わたしは、その罪人のかしらなのである**」（1：15）。「**わたしは罪人のかしら**」ということを、パウロは生涯忘れないことでありました。私こそ、救われるに値しない、なんの価値もないような者であった。しかし、罪人のかしらであるこの私にさえ、神は十字架の愛を注いでくださった。

パウロに注がれたこの神の愛は、今も変わることはなく、私たちにも注がれています。私たちがもし、十字架に表された神の愛に信頼できなかったなら、私たちはこの世において、何を頼みとし、何に望みを置いて生きることができるでしょうか。それ以外に本当に信頼できることがあるでしょうか。私たちの人生に起こってくる様々な出来事は、私たちにとって必ずしも喜ばしいことばかりではありません。そのために、そのような出来事に押しつぶされそうになって、注がれている神さまの愛が見えなくなってしまう、分からなくなってしまうことがあります。そのような弱さを持っている私たちを、主イエスは、繰り返し、繰り

返し、ご自分のもとへ招いてくださいます。9節、「さあ、あなたもわたしのもとへ来なさい」と両手を広げて招いてくださる。十字架に釘打たれたその手を広げて私たちを招いてくださいます。

この神の愛を信じるとき、私たちは患難の中でも、なお耐え忍んで生きていくことができる。3節に、「**それだけではなく、患難をも喜んでいる**」とあります。患難にあっても、そこで自分を捨ててしまうことなく、なお耐え忍んで行くことができる。なぜなら、どんなことがあっても、愛の神によってこの私が捨てられることはない、と知っているからです。9、10節では、パウロはキリストの十字架によって救われた私たちは、これから後も、この神の愛から引き離されることはないことを語ります。

「**わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう**」。私たちのために御子を捨てられた神は、これから後も、この私たちを捨てるようなことは決してない、救い続けてくださるという。「**罪人であったときでさえ**」とありますが、私たちは、救われたからもう罪人を卒業したかというと、そうではない。なお、罪に苦しむことがあります。そうしますと、私たちの中で、「もう、ダメだ」と思ってしまう。悔い改めてクリスチャンになったのに、さすがに神さまも飽き飽きして、「何だ、もう失敗だった」と思われるんじゃないかと思う。パウロがここで言おうとしたのはそういうことではありません。「**罪人であったときでさえ**」、私たちのために死んでくださったお方は、そのあと何度転ぶことがあっても、なお、その私たちを捨てることはない。私たちが生きている中で苦しむことは、自分で自分を捨ててしまいそうになることです。神さまの愛が分からないときに、自分を責めてしまう。自分はダメだ、こんな自分ではダメだと、自分を責める。自分を否定する心です。私たちはどんなにその心に囚われてしまっているでしょうか。自分を否定する心を隠すために、人に対して威張ってみたり、自分を大きく見せようとしたり、あるいは人を批判する。それは自分で自分を否定しているときの心の現れです。神さまがこの私を、どんなことがあっても捨てない。神によって私は肯定されているということが分かって、初めて、自分を受け止め直すことができる。新しい自分の発見です。もうダメだと思っていた罪人の私が、神さまによって受け止められている。神によって愛されている、そういう自分を発見する。そういうとき、自分を否定する心から解き放たれてまいります。そして、人を否定しなくてもいい。あの人もダメ、この人もダメとそうやって生きなくてもよくなる。私たちの世界は辛いですね。みんな、他人を否定するような人たちの中で生きている。でも、私たちは違います。神の愛が注がれているからです。ですから、私たちはもう自分を拒むことを止めましょう。神さまがそうしなくていいと言ってくださる。

この神の愛を受けた者たちの生き方として、11節に「**わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエス・キ**

リストによって、神を喜ぶのである」とあります。「ああ、このような神が私たちの神でいてくださって良かった」と、神を喜ぶ。この「**神を喜ぶ**」というところ、新共同訳では「**神を誇りとしています**」と訳します。自分が神によって愛されていることが分かるとき、命をかけるほどに愛されていることが分かるとき、まだ神さまのことを知らない人たちに対して、「これが私たちの神さまですよ」と誇りたくなる。パウロはまさに、神を喜びながら、いや神を誇りながら、ここを書いています。そして私たちも、この神を喜び、神を誇りとして生きるようになる。「どうぞ、あなたも知ってください。私たち罪人は、こんなにも神に愛されているのですよ」。

今朝、この喜びと誇りと共に、それぞれの場所へ帰って行こうではありませんか。十字架に表された神の愛は、この週も変わることなく私たちに注がれているからです。

お祈りをいたします。

「**まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである**」

天の父なる神さま、あなたの御名を讃えます。

パウロが、神の愛をどこに見るべきかを真っ直ぐに指し示してくれました。周りに起こってくる出来事ではない、あの人、この人が何を言うかではない。御子イエスが私たちのために、私たちに代わって十字架にかかってくださいました。命をかけるほどに、「あなたは死んではならない。神を信じて生きよ」と語ってくださることをありがとうございます。この神に支えられて、今週もそれぞれの場へと出てまいります。私たちが生きている社会は、お互いに他の人を否定することによって自分を肯定しようとする、そういう悲しい罪の中であります。けれども私たちは、その流れの中に生きることはいたしません。そうではない。神が私たちを愛していてくださる、決して捨てることなく支えてくださる。その愛に土台し、支えられて、今週もそれぞれの場所にあって生かしてください。愛する兄弟姉妹一人一人をお支えくださることをお願いいたします。

病気の中にある方々、特に入院しておられる方々がおられます。どうぞ、その枕辺に主が共にいてくださり、厳しい闘病生活をお支えくださることをお願いいたします。

新年度に入り、学校や職場において新しい歩みを始められた方々、緊張を覚えながら一週間過ごしたでしょうか。それぞれの方々を支えてくださって、その新しい歩みを豊かに祝福してくださることをお願いいたします。

今週も、東北教区の五つの教会、弘前、三沢、築館、仙台、福島、それぞれの教会を祝福し、立てられている牧師たちをこの1年もそれぞれの場にあって尊くお用いくださることをお願いいたします。

私たちの教会の献身者であります千葉和幸先生とご家族の上に、遣わされています岬教会の上に、変わらぬ豊かな恵みがありますようにお願いをいたします。

主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

（仙台南光沢教会牧師佐藤信人）